

ロシアへ愛をこめて — デタントこそがみんなの勝利

ユージン・ドイル（ニュージーランド作家）著、脇浜義明訳、田中一弘補訳 *脚注は訳注

Peals and Irritations、2023年2月24日



先週のびっくりするようなウクライナ戦争に関する事態の展開の報道には、一つ重要な事実が欠けている。ミュンヘン安全保障会議（MSC2025）、トランプとプーチンの電話会談、ヨーロッパとウクライナを排除した停戦交渉、ピート・ヘグセス米国防長官の驚くべき発言¹、NATOのウクライナ進出という長年の計画の終焉、マルコ・ルビオ米務長官とロシアのセルゲイ・ラヴロフ外務大臣との歴史的なリヤド会談などの報道で、一つ大事な事実が書かれていない。それは、ロシアが戦場で勝利しているという事実だ。そのことが、トランプ新政権の政治的計算の基礎になったのに、それに触れていないのだ。

どこの国でも新政権は前政権の失敗した軍事政策のツケを背負うのを嫌がるものだ。トランプ政権は前のバイデン政権にくらべて現実的でプラグマティックで、ロシアにとって生存の戦いとなるウクライナ戦争でロシアを敗北させることは不可能と見て取って、それに応じた政策を選択したのは明白である。ウクライナ戦争がロシアにとって持つ意味を分かっていたのは私のようなフリー・ジャーナリストだけでなく、国際関係問題では私が師匠とみなすジョン・ミアシャイマー（シカゴ大学教授）、グレン・ディーセン（ノルウェー大学教授）、チャス・フリーマン（中国問題専門の元外交官）も分かっていたことだった。

しかし、今やロシアと米国はウクライナ戦争停戦より大きなことを実現しようとしているようだ。両大国の関係正常化（デタント）で、それが実現すれば大きな経済的・地政学的影響を發揮し、願わくば苦しんできたウクライナ人民、そして両巨大怪獣の間で苦しんできた国々の人民にとってもいい結果となればよい。

新デタントはウクライナ再建、ロシアと西欧の外交関係の復活、地球最後の日の時計の針を1～2分戻し、交易が復活し、高騰しているエネルギー価格を下げる可能性がある。

ロシアは数千億ドルの国家資産の凍結など米国の制裁の嵐を長く耐えてきた。さらに、ウクライナと同様、過酷な消耗戦争で被った物的・人的損傷を乗り越えた。ロシアが正常化と言われるものを歓迎するのは明らかだが、い

¹ ウクライナが2014年前の領土を取り戻すのは非現実的、ウクライナのNATO加入も非現実的等々。

かなる犠牲を払ってでも、というわけではない。NATO はなおもたくさんの武器弾薬をウクライナに送っているの
で、まだまだ解決とはいえない。トランプの気持ちの変化ですべてがひっくり返る可能性がある。

しかし、トランプとプーチンの頂上会談で米国の政策の劇的な変化が起きるかもしれない。ウクライナへの爆弾、
ドローン、ミサイルなどの軍事支援で約3500億ドルを使ったのに、今や米務省のウェブサイトは、喜劇的な
控え目の表現で、「米国は、ロシア・米国の双方の外交交換の運営を正常化するうえで必要な方向へ進む目的で、両
国関係を苛つかせている諸問題に取り組むための協議の場を設置したい」と述べている。

これまでロシアが戦争目的としてきたものが実現される可能性が高まり、バイデン政権やヨーロッパの指導者た
ちの主張、つまり戦争をやめればロシアの西方侵攻を許すことになるという主張は、現実と遊離している。しかし、
ゼレンスキーは諦めない。彼は今週「ロシアのヨーロッパ征服の危険は100%だ」と言い張った。これに対しプ
ーチンは「バカなことを言うな。ロシアは NATO 諸国と戦争する理由も意図もない。地政学的にも、経済的にも、
政治的にも、軍事的にも何の利益もないからだ」と言った。

ロシアのヨーロッパ侵攻「脅威」については、私は、ワシントンにある「責任ある政治のためのクインシー研究
所」(Quincy Institute for Responsible Statecraft)の研究者たちの英知に敬意を表したい。彼らは「ヨーロッパへのロシ
ア脅威の正しい分析」という論文で「ロシア政権が NATO 加盟国へ侵攻する意図も能力もないし、現在 NATO に
加盟している旧ソ連邦諸国、とりわけバルト海諸国とポーランドとルーマニアをロシアの属国にしようとしている
という主張を裏付ける証拠はない」と述べている。

ロシアの戦争目標のいくつかは、正式交渉が始まるまえから、譲歩されたように見える。ウクライナは中立国に
復帰し、西側軍事同盟に加入するべきではないというロシアの主張がその一つである。外交努力ではなく、戦争に
よってロシアに圧力をかけ、ロシアを除け者国家にしようという西側の馬鹿げた攻勢が、トランプのプラグマティ
ズムで崩れた。ようやく米露それぞれの外交使節が正式に活動するようになった。「この和平への道を進めるため
には外交施設を正常に十分に機能させなければならない」とマルコ・ルビオ国務長官が言った。これは外交を米国の
(願わくば EU の) 対外政策の道具として使う意志へ戻ることを表している。

今週、引退した外交官チャールズ・フリーマンは、「どういうわけか戦争を戦い、その間は敵と話し合いをしない
というのが立派な態度だと考えている人々がいる。こういう発想が永遠戦争のレシピとなる。しかし、今や戦争の
終末期にあり、戦争を終わらせるためには相手と話し合わなければならない」と、アンドリュー・ナポリターノ判
事に語った。

時代の趨勢を示すもう一つのサインは、ロシアが以前から言ってきたこと、つまり「過去によく行われた一時的
停戦でなく、永久的な戦争の終焉の必要」を米国が認めたことである。これは先週米国の国家安全保障担当補佐官
マイケル・ウォルツがサウジアラビアで述べた言葉である。そのための中心的課題となるのは、ヨーロッパ全土、
いやそれを越えた地域に安全保障体系を構築すること — 関係諸国の懸念に対処し、ミサイルシステム、どこにど
れだけの数のミサイルを配備してよいか、その検証方法、領土主権の尊重、紛争解決方法や危機管理システムの
確立などを、関係国が全部が納得できる形で決めることだ。これは簡単なことではないが、できないことではない。

ウクライナは2014年以来戦場となった東部のロシア系住民が多い地域を割譲しなければならないだろう。東
部のロシア系の弾圧を続けて、ロシアから領土を取り戻すべきだと言うのは、好戦的民族主義的な頑固者だけであ
ろう。世論調査では、多くのウクライナ人はロシア語話者の多い領土の一部を失っても、和平交渉をし、戦争で荒
廃した生活とインフラの再建に移るべきだと希望している。西側の戦争屋は喜ばないが、たとえ見苦しい平和でも
恰好のよい戦争より人々の利益になることは、時の経過で証明されるであろう。

西側は敗戦を認める苦い方向へ再び向かわざるを得ないだろう。確かに戦勝の祝福をできないが、間違った政策
を反省する機会となるだろう。何しろ、数十万の人がこの代理戦争で死んだのだ。国は崩壊しており、戦争がもた
らした人口統計上の傷を考えると、回復するには何世代にもわたってかかる可能性がある。真実が明らかになり、
野心が敗れるのはショックだろうが、その代わりもっと良い事態が発展する。ロシアの若者、あらゆる年齢のウク
ライナ人が不必要な死に追いやられることがなくなり、市民生活と経済が復活し、西側世界では不在だった外交が
戻ってくる — 少なくとも米露外交が。

もちろん、ウクライナ国とウクライナ人民を守らなければならない。ウクライナ人とロシア系ウクライナ人の間
の権利や利益がバランスよく相互尊重されなければならない。誰も安全に暮らせ、民族的迫害が起きないようにし
なければならない。そうはいつても、悲惨な事件が生じる可能性はすぐにはなくなるだろうが、いまや新しい

地政学的現実へ移る過渡期になっているのだ。私は平和を信じ、外交を信じる。平和と外交を選択すべき時になったと思っている。



ユージン・ドイルはウェリントンを拠点とするライター。中東やアジア太平洋地域の平和と安全保障問題について幅広く執筆。公共政策プラットフォーム solidarity.co.nz を主催。

Eugene Doyle

Pearls&Irritations を支援できますか?

Pearls&Irritations は、オーストラリアに残っている独立した声を持つ数少ないメディアの1つで、本質的な問題に積極的に焦点を当てているようです。彼らの声が強くなりますように!

[ここをクリック](#)すると、毎月または1回限りの寄付を行うことができます。

Pearls and Irritations の声とリーチを広げるための寄付をご検討ください。